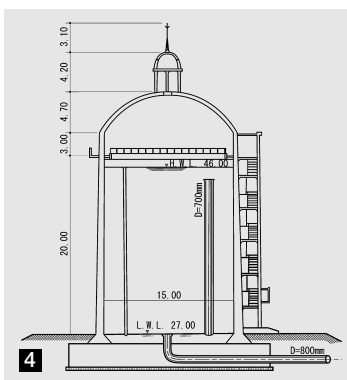


千葉県水道局 栗山配水塔



諸元

構造	鉄筋コンクリート造
規模	
高さ	31.9m
内径	15.0m
有効水深	20.0m
有効容量	3,534m ³
竣工	1937(昭和12)年 3月31日

1) 春の栗山配水塔(西側)(千葉県水道局提供) 2) 栗山配水塔(南東側)(2006年11月29日撮影) 3) 圧力測定器と記録計 4) 竣工当初の栗山配水塔断面図※3 (『千葉縣江戸川配水塔竣工図』より作成) 5) 発見された栗山配水塔にまつわる文書 6) 栗山配水塔位置図

参考文献

- 1) 日本水道協会：日本水道史、1967
- 2) 千葉県営水道史：千葉県営水道史、1982
- 3) 千葉県教育委員会：千葉県の産業・交通遺跡、1998

注

- ※1 千葉県水道局白井高架水槽のこと
- ※2 創設時は江戸川水源工場と呼ばれていた
- ※3 頭頂部の避雷針は改修されている

阿部貴弘 ABE Takahiro
正会員
ハンリックコンサルタンツ(株)
総合計画部



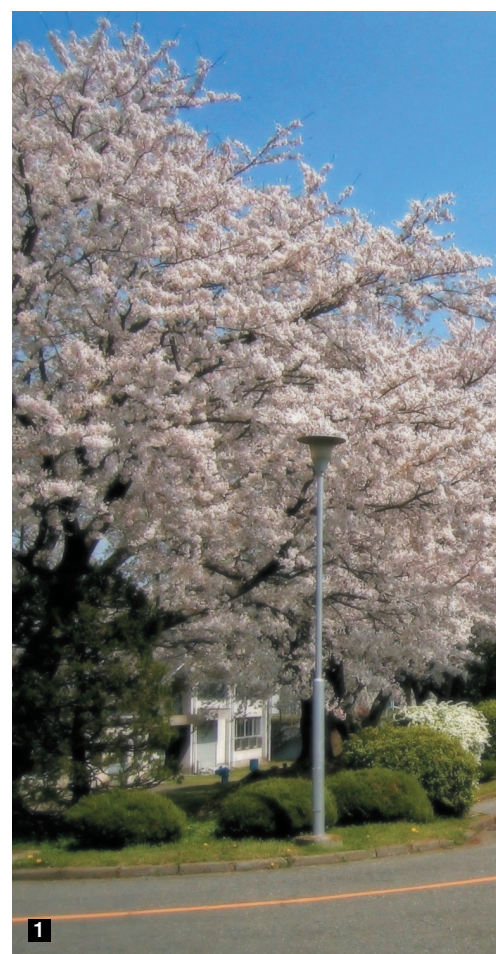
千葉ユータウンに育つた私は、配水塔といえ
ば、家のそばに聳える巨大で無機質なコンクリ
ート造の円筒を思い浮かべる。華麗で荘厳な
デザインを誇る配水塔など、縁のない土地の
ものだと思っていた。

ところが、同じ千葉県水道局の管内に、しか
も通勤電車の車窓から見える場所に、齢七十
を控えなお現役の美しい配水塔があるという。
二〇〇六(平成十八)年度選奨土木遺産に選
ばれた千葉県水道局栗山配水塔写真²であ
る。

千葉県宮水道の創設

近代上水道の普及は、横浜市を皮切りとし
て、明治二十年代から全国各地で始まった。一
方、地下水が豊富で主要な港湾都市が少なな
った千葉県では、昭和に入つてようやく交通
機関の発達に伴う東京からの人口流入、コレ
ラをはじめとした伝染病の流行、また一部の
地域において井戸水の水質が悪かったことなど
を背景として、水道事業に対する必要性が強
く認識されるようになる。

そうしたなか、一九三二(昭和七)年六月に
内務省河川課長から千葉県知事に就任した
岡田文秀の強いリーダーシップのもと、将来の



1

江戸川沿岸の開発とそれに伴う人口増加、さ
らに東京湾岸の一大工業地帯としての発展を
視野に入れ、近代上水道の設置が検討される
こととなる。また、水道事業の市町村公営を
原則としていた水道条例、後の水道法が改正
され、市町村以外の企業者にも水道事業が許
可されるようになる。こうして、一九三四(昭
和九)年三月三十一日、内務省の認可を受け、
給水人口二十五万人、一人一日最大給水量
一五〇リットル、一日最大給水量三万七五〇
〇立方メートル、千葉市、松戸町、市川町(い
ずれも当時)など一市十二町村を給水区域
とした千葉県宮水道がスタートした。

古ヶ崎浄水場と栗山配水塔

一九三七(昭和十二)年、栗山配水塔は、約
五キロメートル離れた古ヶ崎浄水場の付帯施
設として、江戸川左岸の段丘上に建設された
(図6)。古ヶ崎浄水場で浄化された水が、栗山
配水塔にポンプで圧送、そこでいったん貯水さ
れ、塔圧力により浦安町や検見川町(いずれ
も当時)などへと配水されていた。

鉄筋コンクリート造の配水塔の円筒形の胴
体には、ドーム状の塔屋が被さり、さらに頭頂
部には四本の柱で支えられた換気口が備わっ



5

ている。また、ドームの周囲にはテラスがめぐら
され、配水塔全体の意匠を引き締めている。
配水塔の設計施工には、第九代水道局長の
式田十郎が携わっていたことが、本人の回想記
に記されている。しかし、具体的設計をいつた
い誰が行ったのか、実際の設計者については明
らかではない。

さて、戦後の水需要の増大に伴い、県営水
道施設では数次にわたる拡張事業が行われ
た。一九五六(昭和三十一年)から始まる第
一次拡張事業では、配水塔を取り込むよう
に栗山浄水場が建設され、このとき配水塔の
管理は古ヶ崎浄水場から栗山浄水場へと移管
された。

一九七〇(昭和五十五年)年には、配管の敷設
替えのために、四三年ぶりに配水塔の水抜き
と塔内整備工事が行われた。この際、塔内の
水没部における壁面クラックなどはほとんど見
られず、当時の技術水準の高さを窺い、知るこ
とができる。

また、塔内階段部一階には、配水塔建設当
時のものと思われる圧力測定器と記録計お
よび記録用紙が残されている写真³。
ところで、近年、古ヶ崎浄水場の倉庫から、
栗山配水塔にまつわる文書が多数発見され



6

た写真⁴。作業日誌や往復文書など、かつて
の文書をひも解くことで、何か新しい発見が
あるかもしれない。今後の調査研究が期待さ
れる。

現役を続ける栗山配水塔

北総線の矢切駅から続く緩やかな坂道を
登り、浄水場の敷地に近づくと、どこもなく
のんびりと、そして悠々と、緑の芝の上に佇む
配水塔の全容が見えてくる。建設以来約七十
年、第二次大戦の混乱や幾多の水害、周辺地
域の急速な都市化を優しく見守り続けてき
た栗山配水塔は、今なお現役の施設として、
松戸市および市川市一帯の約二〇万人への配
水を担うとともに、松戸・船橋両給水場への
送水管の調圧水槽として重要な機能も果た
している。近傍の江戸川左岸矢切地先に新設
される、ちば野菊の里浄水場の稼働により、
二〇〇七(平成十九)年度に古ヶ崎浄水場は閉
鎖されるが、栗山浄水場、そして栗山配水塔
は、今後も現役施設として活躍し続ける。

時代や環境の急激な変化にも風化するこ
のない機能とデザインを備えた栗山配水塔。毎
朝の通勤電車の車窓から、ときには途中下車
をして、今後その英姿を楽しみたいと思う。